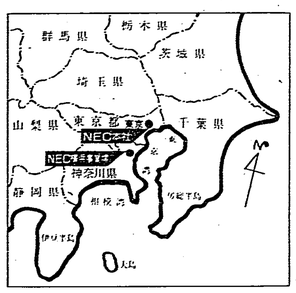
十勝毎日新聞

発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話＝編集㉒2121、広告㉓2323、総務・販売㉔2222
©十勝毎日新聞社 1987

宇宙開発最前線

……8

日本電気



日本電気株式会社　明治三十二年創業、通信、コンピューター、電子デバイス、ホームエレクトロニクス分野の世界トップメーカー。資本金千百十六億円、売上高一兆九千七百五億円（六十年度実績）、従業員数三万六千八百三十二人。取締役会長、小林宏治氏、社長、関本忠弘氏。

東京都国鉄田町駅に隣接した森永ビル。このハーニ十三階が日本電気株式会社（NEC）本社だ。C&C（コンピュータ・アンド・コミュニケーション）という明確な事業戦略を掲げ、通信とエレクトロニクス分野で世界のトップを走る。五年連続大卒技術系人気ナンバーワン。宇宙開発でも同社は衛星通信のリーダーといえる。

一☆宇宙開発の栄光の歴史一

黒田隆二同社理事支配人。

黒田隆二理事

小野英男技師長

この人はNEC宇宙開発事業部のトップ、というより日本宇宙開発の名物男的存在だ。

黒田支配人の口からNECの栄光の歴史が飛び出した。「糸川英夫東大教授がペンシルロケットを開発した昭和二十九年からNECは宇宙開発に取り組みました。一番古いのです。以来、文部省宇宙研が打ち上げた科学衛星はすべて独占している。日本の人工衛星は四十五年のおおすみ以来三十四個打ち上がっているが、このうち二十一個はNECがインテグレーター、つまりすべてNEC製。この外のものでも大半かかわっており、全く関与していないのはゆり1、2号、きく2号の三基だけ。しかも四十六年には国際通信衛星のインテルサット4号の中継器をアメリカのヒューズ社に納入している。地上局アンテナでは世界の六〇％がNEC、この半分はシステムすべてNECが担当している」―。

衛星分野ほぼ独占

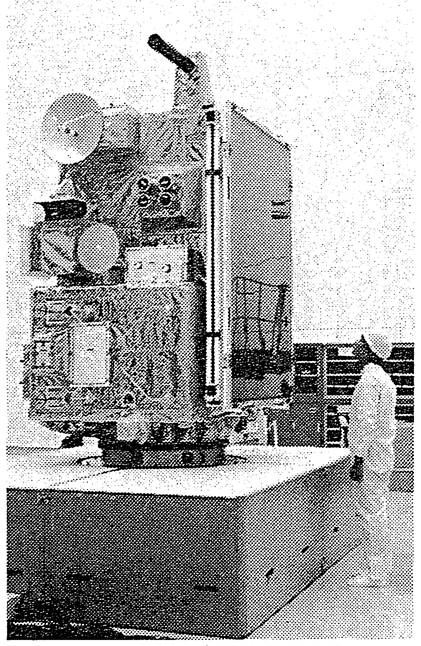
夢とロマンに集まる優秀な人材

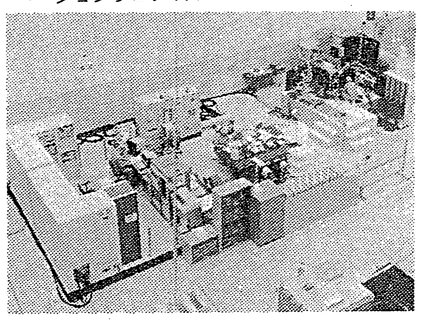
二月五日、鹿児島県内ノ浦から打ち上がった科学衛星アストロC（ぎんが）、十八日種子島から打ち上がったMOS1（もも1号）、これもNEC。特にMOS1は七百五十キログラムで今までの三百五十キログラムに比べグンと重い。これからの計画をみても衛星はもちろん、NASAの宇宙ステーションに取り付けられる日本のモジュールの頭脳部分はやはりNECだ。衛星分野のNECの強さは当分続きそうだ。

一☆まず情報センター作れ一

だが、業界の顔だけに黒田支配人の話は日本の宇宙開発全体に及ぶ。「日本の宇宙開発予算は年一千二百億円、みそ、醤業界の出荷高と同じで産業と胸を張れるものではない。NASAは二兆円、軍事予算を入れると米は四兆円、日本人は一人ラーメン二杯分、千円しか宇宙開発に支払っていない。しかもソ連は二千個、米は一千個衛星を打ち上げたのに対し、三位の日本は三十四個。あまりに開きが大きい。宇宙開発が将来の日本を引っ張ると考えるなら、せいぜい予算は年一千二百億円、みそ、醤業界の出荷高と同じで産業と胸を張れるものではない。

そして、話は宇宙基地の誘致運動に熱心な大樹町に及んだ。「宇宙開発が日本の将来の中核になると考えている人が多いが、いかに少ないか。その点、マスコミは一千個衛星を打ち上げたのに対し、三位の日本は三十四個。あまりに開きが大きい。宇宙開発が将来の日本を引っ張ると考えるなら、せいぜい道開発予算の半分、五千億は当面必要だろう」。


打ち上げに成功したMOS1（もも1号）と横浜事業場宇宙開発棟内の衛星インテグレーションフロア（下）



一☆工場というより研究室一

この外、フリーフライヤーに使うフレキシブルリーラー、姿勢制御機械・スタートラッカーなど一流の機器を見せてもらった。どれも目を見張るテクノロジー機器ばかり。単純なオートメーション方式でないため、工場内は実に静かで、研究室のイメージだ。

小野技師長は「日本の宇宙開発自体がまだ器が小さいため、NECの場合では宇宙開発はハデにみえても、売り上げのせいぜい一％。でも夢があるせいでしょうか、社内の優秀な人材が集まってきます」と教えてくれた。

黒田支配人は本社で、将来の宇宙開発について「衛星は単一でなくプラットホームのようなマルチ型になる。そこへスペースプレーン、シャトルが行って、修理をする。さらにそれは宇宙工場、工業団地になり、宇宙環境を利用した実験や製造が行われる。もっと先はコロニー（植民地）になるかもしれない」と解説してくれた。こうしたロマンが若い技術者をひきつけ、やがては実現に向かうのだろう―こんな思いを抱きながら横浜事業場を後にした。

（小野寺　裕記者）

（つづく）

年間キャンペーン　目指せ宇宙基地・第一部

これは十八日打ち上がるものと同じ、それ以上に過酷な宇宙環境試験を受けている。小型自動車の大きさで「こんなものが宇宙に上がるのか」と感心してしまう。小野技師長は「弟分のこれは兄が寿命が尽きた時打ち上がる可能性があるし、故障が起きた時はこれを解析に使う。必ず衛星は兄と弟がいるんです」と説明してくれた。

ってほしい。そのためには東京にいるのと同じ情報が集まるように、まず情報ネットワークセンターを基地近くにつくることを提案したい」。

本社の取材を終え、京浜東北線で約一時間、同社横浜事業場に向かう。出迎えてくれたのは日本で最初に宇宙部門の技術師の資格を取った小野英男技師長。おおすみなど初期の衛星を手がけてきた人だ。同社が世界に輸出している自慢のマイクロ波を使った通信装置を見ながら宇宙開発棟へ。白衣と帽子を身につけ、エアシャワーを浴びてからMOS1の兄弟機に近づいた。